

飲^{のち}みての後^は 散^りぬともよし
笠^{かさ}沙^さ弥^み 卷5-821

(青柳に梅の花を手折り、髪にかざして相ともに楽しく酒を飲んだその後なら、散ってしまってもかまわない)

笠沙弥、別名は満誓沙弥(まんぜいさみ)。俗名笠朝臣(あそん)麻呂。

2. 「年^{とし}のはに 春^{はる}の来^{きた}らば かくしこそ

梅^{うめ}をかざして 楽^{たの}しく飲^{のみ}まめ
大^{だい}令^{りやう}史^し野^{やう}氏^{しやじ}宿^{すくな}奈^な麻^ま呂^ろ 卷5-833

(年々春が巡ってきたならば、このように梅をかざして、思いっきり楽しく酒を飲もうではないか)

「大令史」は大判事の書記官。

3. 「春^{はる}柳^{りやう} 縵^{まん}に折^をりし 梅^{うめ}の花

誰^{たれ}か浮^うかべし 酒^{さかづき}杯^への上^{かた}に
壱^い岐^ぎ目^め村^{むら}氏^し彼^か方^{かた} 卷5-840

(春柳、この柳の蔓(かずら)に挿そうとみんながせっかく手折った梅の花。その花を誰が浮かべたのか。めぐる酒杯の上)

この観梅の宴は旅人邸で行われた。

歌碑：長崎県壱岐市 サンドーム壱岐跡地

V. 後^{のち}に梅^{ついで}の歌^{うた}に追^お和^わする四^よ首^{しゆ}

上記の梅花32首に追加された4首のうちの1首

「梅^{うめ}の花^{はな} 夢^{ゆめ}に語^{かた}らく み^みやび^びたる
花^{はな}と我^{われ}思^{おも}ふ 酒^{さけ}に浮^うかべこそ
作者^{しやう}不^ふ詳^{じやう} 卷5-852

(梅の花が夢の中でこう語った。「私は風雅な花だと自覚しています。どうか酒の上に浮かべて下さい」と)

この作者については大伴旅人説、山上憶良説がある。

「みやびたる」の「みやび」は「鄙(ひな)び」に対する語で風流なの意。

VI. 丹^に生^ふ女^に王^{わう}、大^{だい}宰^{さい}帥^{しゆい}大^{だい}伴^{ばん}卿^{けい}に贈^{くわ}る歌^{うた}二^に首^{しゆ}

その中の1首

「古^{ふる}人^{ひと}の 飲^たへしめ^たる 吉^き備^びの酒^{しゆ}
病^やまばすべ^なし 貫^ぬ簀^き賜^すらむ
卷4-554

(昔馴染の方が送って下さった吉備の酒。このお酒も飲みすぎて気分が悪くなったらどうしようありません。今度は枕元に置く貫簀を頂けたらと存じます。そうしたら安心して頂けましょう)

「貫簀(ぬきす)」とは手や顔を洗う時、洗い桶の上に乗せて水しぶきを防ぐ竹で編んだ道具。

丹生女王が都から大宰府の旅人に贈った歌。その他にも数首の歌を贈っており、旅人と丹生女王は心許した異性の友人であったらしい。

古来、吉備のうち備後(現広島県)が薬酒の産地として有名で、旅人が筑紫に下る途中に病身の妻大伴郎女とともにこれを飲み、効用が高いとみてこれもまた病身気味の丹生女王を思い、見舞いに送ったのである。

美しくもほほえましい、老いたる男女の交際である。

VII. 大^お伴^{ばん}坂^{さか}上^{のうへ}郎^{らう}女^{にょ}の、親^う族^{がら}に宴^{うたげ}する歌^{うた}一^{いっ}首^{しゆ}

「かくし^つつ 遊^{あそ}び飲^{のみ}みこそ 草^{くさ}木^きすら
春^{はる}は生^おひ^つつ 秋^{あき}は散^ちり行^ゆく
卷6-995

(皆さん、今夜はこうして楽しく遊び、思う存分(お酒を)飲んでください。草や木でさえ春は生い茂って、秋には散ってゆくのですから)大伴坂上郎女は旅人の異母妹で、旅人同様お酒が好きな熟女であったらしい。

草木に寄せて人生の短さを述べ、この世にある間は楽しみの限りを尽くそうという歌である。

VIII. 大^お伴^{ばん}坂^{さか}上^{のうへ}郎^{らう}女^{にょ}の歌^{うた}一^{いっ}首^{しゆ}

「酒^{さかづき}杯^へに 梅^{うめ}の花^{はな}浮^うけ 思^{おも}ふどち

飲みての後は 散りぬともよし

卷8-1656

(酒杯に梅の花を浮かべて心の通い合うもの同士が飲みあった後なら、梅の花など散ってもかまいませんわ)

「思うどち」とは気のあった仲間のこと。

歌碑：愛知県豊明市 大蔵池公園 (写真5)

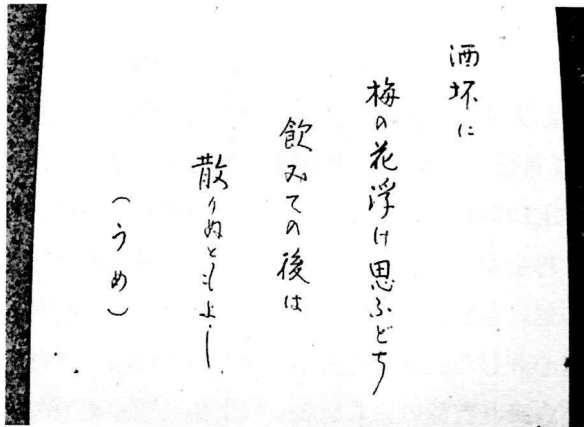


写真5：大伴坂上郎女の歌碑

これに答え、「和ふる歌一首」として

「官にも 許したまへり 今夜のみ

飲まむ酒かも 散りこすなゆめ

作者不詳 卷8-1657

(お上からもお許しがでている。今夜だけしか飲めない酒ではない。だから梅の花よ、散らないでおくれ、決して)

「官(つかさ)」とは役所または役人。

この歌は前歌の結句を承け、それを否定することで、今夜の歓楽を幾夜でも続けたいと詠っている。

左注に「酒は役所で禁制して、都内村里の住民は集まって飲宴してはならない。ただし、近親同士一人二人が飲んで楽しむことは許可するといふ。そこでこの歌の答えの作者は上二句を作ったのである」とある。

この歌が詠まれた当時には禁酒令はあったものの、それほど厳しいものではなく、2~3人の親しい者同士ならよいとお上のお達しがあったようである。

IX. 河内女王の歌一首

「橋の 下照る庭に 殿建てて

酒みづきいます 我が大君かも

卷18-4059

(橋の実が木陰に赤々と照り映えるこの庭に、御殿を建ててご機嫌うるわしく、酒宴に興じていらっしゃる、我が大君ですこと)

この歌が詠まれた難波の宮の殿舎は橘諸兄(もろえ)が建てたが、元正太上天皇が造営したように表現している。

X. 「味飯を 水に醸みなし 我が待ちし

かひはかつてなし 直にしあらねば

作者不詳 卷16-3810

(甘い蒸し米を醸(かも)してお酒にし、私がお待ちした甲斐は一向にありませんわ。あの人本人が来たのではないから)

「味飯(うまいひ)」とは米を蒸した美味な米飯。左注に「昔娘子(おとめ)がいた。その夫に離別され恨めしく思いながら幾年かが過ぎた。その時、夫はまた別の女を娶り、本人は来ないでただ贈り物だけよこした。そこで、娘子はこの恨みの歌を作ってその返事とした」とある。

お酒を用意し夫が来るのを待ったが、来なかったことに対する恨み言の歌である。

XI. 湯原王の打酒の歌一首

「焼き大刀の かど打ち放ち ますらをの

寿く豊御酒に 我酔ひにけり

卷6-989

(焼き鍛えた立派な大刀(たち)のかどを打ち放って、ますらおが祝う奇(くす)しき酒に私はすっかり酔ってしまいました)

「打酒(ちやうしゆ)」とは酒を酌んで飲むことをいう中国の俗語。

「焼き大刀」は何度も火に焼いて鍛えた鋭利な

大刀。

「かど打ち放ち」は不詳。

万葉時代には、酒を飲む時に大刀を振って酒をほめる儀礼をし、祝福して酒を飲む習慣（ならわし）もあったようである。

XII. 攀^よち折れる保^お宝^ほ葉^{がしは}を見る歌二首

そのうちの1首

「皇祖^{すめろぎ}の遠^{とほ}き御代^{みよ}御代^{みよ}は^し敷^しき折^しり

酒飲^{さか}むといふそこのほ^ほが^がし^しは
守^{かみ}大^{おほ}伴^{とも}宿^{のすく}禰^ね家^や持^{もち} 卷19-4205」

(いにしへの天皇の御代では、重ねて折って、酒を飲んだということです。このほおがしわは)

「攀(よ)ち折れる」は折り取ること。

「ほほがしは」の現代名はホオノキで、山地に自生する高木落葉樹(写真6)。葉は古来食物を盛る食器に利用され、また三角錐状にして酒を入れて飲んだという。現在も収穫した青葉(写真7)を塩漬けにして茶褐色に変色させ、乾燥してから朴葉(ほおば)味噌料理として利用されている。

宴に生命力を招(お)ぎ、すくすくと成長する聖なる樹木として仰ぎ見、酒に酔っているのである。

歌碑：富山県小矢部市 砺波山源平ライン 萬葉公園

XIII. 閏^{うるふ}三月^のに、衛^ゑ門^{もん}督^{のかみ}大^{おほ}伴^{とも}古^こ慈^じ悲^ひ宿^{のすく}禰^ねにして、
入^{にふたう}唐^{ふくし}副^こ使^{まろ}同^{のすく}胡^ね麻^せ呂^ん宿^せ禰^ん等^にに餞^{せん}する歌二首

その2首のうちの1首

「唐^{からくに}国^にに^ゆ行^たき足^たらは^{して}帰^こり来^こむ

ます^{たけを}ら^み健^{きたて}男^{まつ}に^御酒^酒奉^奉る
多^{たち}治^ひ比^ま真^ひ人^と鷹^{たか}主^{ぬし} 卷19-4262」

(唐国(中国)に行き大任を果たして、必ず帰って来られる頼もしき男子。この男子に御酒を捧げます)

左注に「右の一首は、多治比真人鷹主が副使大



写真6：ホオノキ(古代名：ほほがしは)

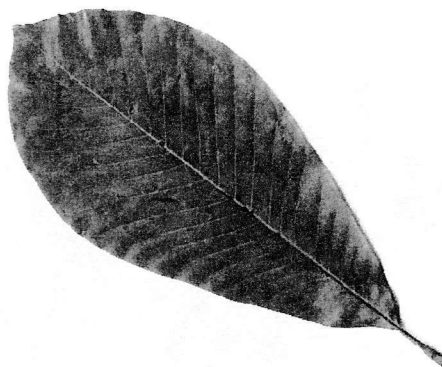


写真7：ホオノキの葉

伴胡麻呂宿禰を祝福したものである」とある。

万葉時代にはすでに餞別の酒宴があったようである。

藤原清河が遣唐大使を、大伴胡麻呂宿禰が遣唐副使を拜命した。唐国に出発する前に大伴古慈悲宿禰の家で催された胡麻呂送別の宴で、多治比真人鷹主が詠った餞(はなむけ)の歌である。

「行き足らはして」は行って十分に任務を果たしての意。

「ますら健男（たけを）」は雄々しく立派な男子のこと。

「御酒（みき）奉る」は相手の無事、大任完遂を祈って盃の酒を勧めること。

XIV. 「春日なる ^{かすが}三笠の山に ^{みかさ}月の舟出づ
みやびをの ^{かさづき}飲む酒杯に 影に見えつつ
作者不詳 巻7-1295」

（ここ春日の三笠の山に月の舟が出た。風流士（みやびお）が飲む酒杯にその影を映して）
月見の宴を詠った5・7・7、5・7・7で構成された旋頭歌（せどうか）である。

「月の舟」は七夕の夜の月を舟に譬えた表現（?）。

「みやびを（風流士）」とは風流を解する男子のことをいう。

歌碑：奈良県高市郡明日香村 県立万葉文化館
（写真8）



写真8：奈良県立万葉文化館にある作者不詳の歌碑

万葉びとは、やはり現代人に負けず劣らず、お酒が好きだった。

参考文献

『万葉集①～④』新編日本古典文学全集 小学館

『万葉集釋注①～⑩』伊藤 博著 集英社

『万葉集にみる酒の文化 -酒・鳥獸・魚介-』

一島英治著 裳華房

『食の万葉集』廣野 卓著 中央公論社

協力

福岡県飯塚市 歴史資料館

福岡県嘉麻市役所嘉穂庁舎

福岡県筑前町教育委員会

愛知県豊明市都市計画課

奈良県明日香村 県立万葉文化館